

令和5年度 第1回考古学講座 2023.5.6

# 古代相模国府を考える



公益財団法人かながわ考古学財団

齋藤 葵



## 目次

- 1、はじめに
- 2、国府とは
- 3、相模国府はどこに設置されたの？
- 4、大住国府について
- 5、おわりに



## 1、はじめに

今からおよそ 1300 年前、大宝律令が制定され、中央集権的な国家体制が築られました。政治権力を中央に集中させるために、都に近い地域である畿内と、それ以外の七道とに大きく分けられ、さらに「相模国」や「武蔵国」といったような「国」という地域区分がつけられました。そして、その国には地方支配の拠点的な施設として役所が各国に設置されました。

神奈川県は当時だと相模国と武蔵国の一部にあたりますが、本講では相模国に置かれた古代の役所、相模国府について見ていきたいと思います。

## 2. 国府とは

### (1) 政治・経済・文化の中心

国府とは古代の国ごとに置かれた役所、今でいう都庁・県庁のような中心的な施設と、その周りにめぐる道路や市、館などの様々な機能を持つ施設や民家すべてを包括した場所をいいます。国府では都から派遣された国司が国の一般行政や軍事・司法・交通・宗教などの管理にあたっていました。このように、中央は国の様々な部分について、国司を介することで地方支配を進めていました。そのため国府は、国と国を結ぶ駅路などの道路網や河岸沿岸の交通の結節点である水陸交通の要衝に置られました。また、発掘調査からは政治や儀式、饗宴などが行われた中心的な施設だけでなく、館や住居・厨房・市・鍛冶などの各種工房・宗教施設とされる様々な性格をもった遺構や遺物の広がりが見られています。つまり、国府は国の政治・経済・文化の中心となる古代地方都市だったのです。

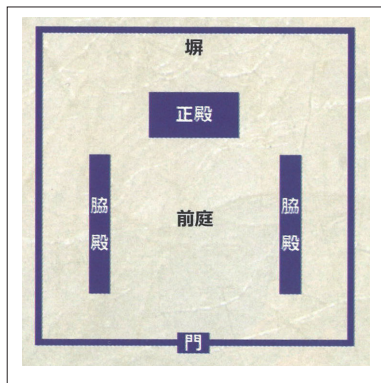


当時の相模国府の景観  
(かながわ考古学財団 2009①)

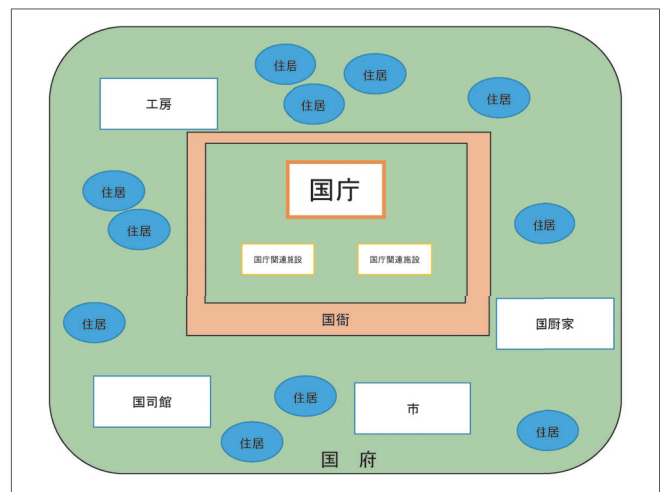
## (2) 国府のイメージ

文献史料において「国衙」や「国庁」などは見られますが「国府」という記載は今のところ確認されておらず、国府が何を指すのかについては研究者によって解釈が様々です。

そこで、今回使用する用語について整理したいと思います。国司が政治や儀式、饗宴を行なう施設を国庁とし、国庁とその周辺に置かれた国庁関連施設群を国衙とします。そして、国衙とその周辺にあった国司館、工房、市などの様々な機能を持つ施設や住居すべてを包括したものを国府とします。その国府の範囲を国府域と呼びます。国府と国府域はさししめず範囲は同じですが、国府は様々な機能を持った集まりを示し、とくに国府の範囲を表す用語として国府域を使います。



国庁の建物配置  
(府中市郷土の森博物館 2016)



国府のイメージ

## (3) 主な施設

### 国庁 (こくちょう)

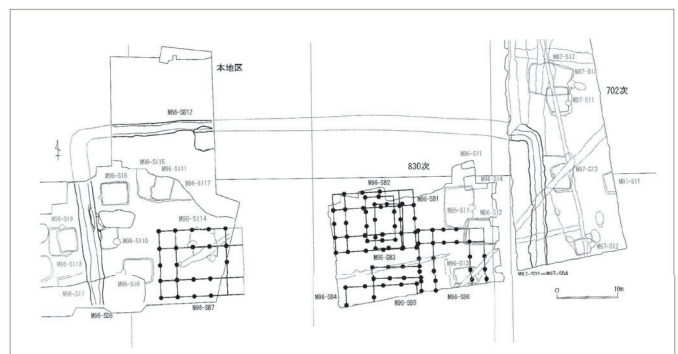
国司が執務を行う場。また、儀礼の場としても使われていたと考えられています。国庁の建物配置については、方形区画の中に正殿とその前に南北に脇殿が置かれるといった形が基本的です。中央は前庭として空間があいています。それぞれの国で建物の配置や構造は、時期によって様々であることが分かっています。

### 曹司 (そうじ)

文書作成、租税の徴収・管理、施設の運営・維持などにあたる官衙的施設をさします。

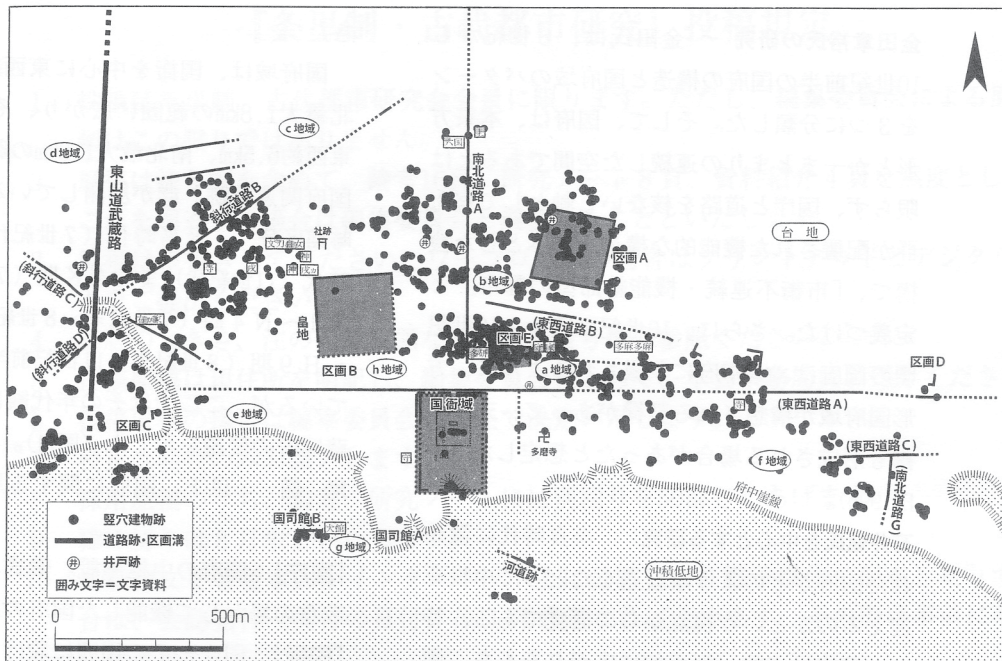
### 国司館 (こくしのたち)

国司の居宅。国司の定員は国の等級によって異なっていました。相模国は上国で、守(かみ)・介(すけ)・掾(じょう)・目(さかん)が1人ずつと史生(ししょう)という書記官が3人(739年以降は4人)、中央から派遣されていました。そうした役人たちが個々で館を持っていて、時期によって場所も移動することを考えると、現在、各国で確認されている館跡の数以上よりも多く存在していたことが推測されます。



武蔵国の国司館  
(野村不動産株式会社・株式会社盤古堂 2008)





8世紀における武蔵国府のようす (江口桂 2017)

### 国厨家 (くにのくりや)

食事の供給や食料・食器の調達・管理を行う施設とされ、様々な種類の食器がまとまって多量に出土する状況や、「厨」などと書かれた墨書土器が確認されます。

### 工房

国府の維持・管理のための手工業生産が行われた場。鍛冶工房や、漆工房、紡織工房など。

### 道・井戸

公的な道路である駅路 (えきろ) が国府内を通る、または近接して走ります。そのほかに、主要道路につながる道や、井戸と諸施設を結ぶ小規模な道も存在します。

### 市・津

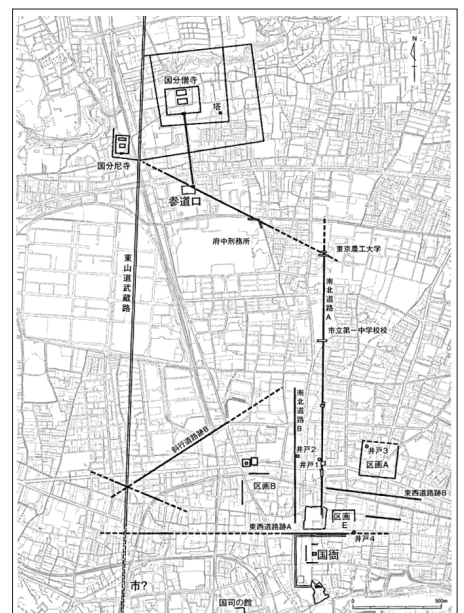
日常的に必要な物資を調達・交易が行われた場所。京の市では全国の様々な特産品が集中することから、自国で生産できない物資を役人・商人・地方豪族が中心となって交易を行い、自国の市で物資を商売していたことが想定されています。

### 一般庶民の居住施設

国府には役人以外に雑徭 (ぞうよう) のため一般民衆から出された徭丁 (ようてい) の一部や、兵士、郡司 (ぐんじ) の子弟などがいたとされています。国府域内の掘立柱建物と竪穴住居の数や分布状況から、掘立柱建物を国司クラスの役人たちが居宅として利用し、大半の人は竪穴住居で暮らしていたことが読み取れます。



鍛冶のようす (府中郷土博 2016)



武蔵国府・国分寺連絡路 (江口桂 2014)

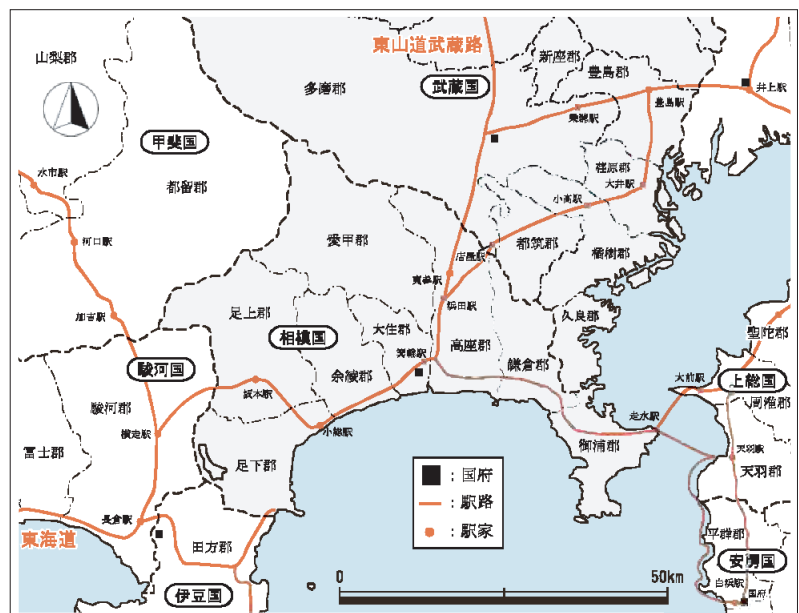
### 3、相模国府はどこに設置されたの？



全国の国府と国分寺 (大橋泰夫・江口桂 2020)

古代の行政区分として、京のある畿内と東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道とに大きく分けられ、さらにそれぞれが複数の国に分割されていました。また、国は郡に分けられており、郡もいくつかの郷（里）に細分されていました。相模国は東海道に属し、8つの郡（足上・足下・余綾・大住・愛甲・高座・鎌倉・御浦）からなっていました。その相模国に、国府はいったいどこに設置されたのでしょうか。

2004～2005年に行われた湘南新道建設に伴う発掘調査において、六ノ域・坪ノ内遺跡から国庁脇殿と推定される南北棟の大型廂付長方形建物が2棟並列した形で発見されました。このことから相模国府の所在地については、平塚市四之宮周辺にあったと近年、有力視されています。



相模国府と駅路 (依田亮一 2020 より引用・編集)





文献史料において、当初、設置された場所から途中で変わったことが示されています。源順（みなもとの したごう）の『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』巻第五（935年）では「国府在大住郡」と記載されています。また、天養（てんよう）年間（1144～1145年）～長寛（ちょうかん）年間（1163～1165年）に出された『色葉字類抄（いろはじるいしょう）』の原典を補った二巻本と、治承（じしょう）年間（1177～1181年）に出された三巻本において、「大住国府」の記載があります。一方で、その記載は寿永（じゅえい）年間（1182～1184年）頃に出された『伊呂波字類抄』十巻本では「余綾ゆるき府」に変わっています。また、『吾妻鏡』治承（じしょう）四年（1180年）の条から源頼朝が富士川の合戦の論功行賞を余綾国府で行っていることが分かっています。このように相模国府の場所は大住郡（平塚市）から余綾郡（大磯町）へ移転されたことが読み取れます。しかし、移転する前の場所の変遷については、これまで大きく3つの説が提示され、相模国府はどこに置かれ、どのような変遷を辿ったのか、論が展開されてきました。

①初期国府が高座郡（海老名市）に置かれたとする説（高座→大住→余綾）

根拠：一般的に国府は国分寺と同じ郡にあることから

②初期国府が足柄郡（小田原市）に置かれたとする説（足柄→大住→余綾）

根拠：海老名市にある国分寺を弘仁（こうにん）十年（819年）に起きた火災後に建てられたものとし、小田原市の千代廃寺を火災前の国分寺、下曾我遺跡を国府関連遺跡とすることから

③初期国府が大住郡に置かれたとする説（大住→余綾）

根拠：文献史料の記載から

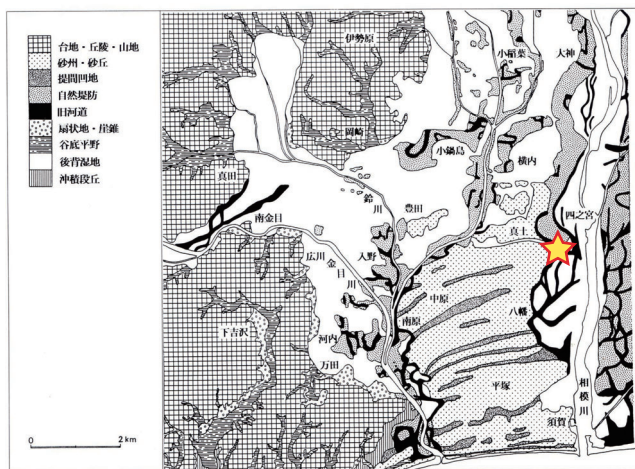
最近では、先に挙げた国庁脇殿の発見といった発掘調査の成果や考古学的な検討から、③の説が有力視されています。



## 4、大住国府について

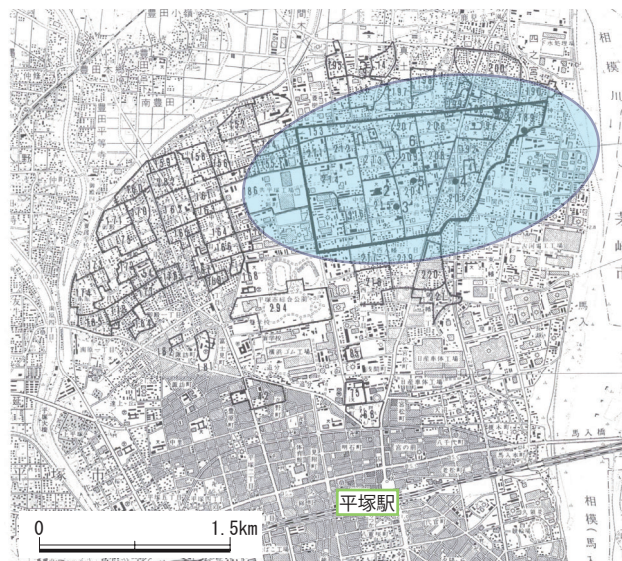
### (1) 概要

大住国府は平塚市の中央部東端に位置しており、東側には相模川が南へ流れ、相模湾へ至ります。地形的には砂丘から自然堤防上に立地しています。国府域は東西約 2.1 km × 南北約 800mの範囲が推定されており、時期的な変遷を見てみると、8 世紀前半に国府域の東側に国庁が設置されるとともに、多くの建物（竪穴住居や掘立柱建物）が確認され始めます。そして、9 世紀にかけて西方の砂丘上へと広がりを見せた後、10 世紀後半から建物の数は減少し、12 世紀にかけて再び東方へ国府域は縮小することが想定されています。



平塚市域の地形

(かながわ考古学財団 2009②より引用・編集)

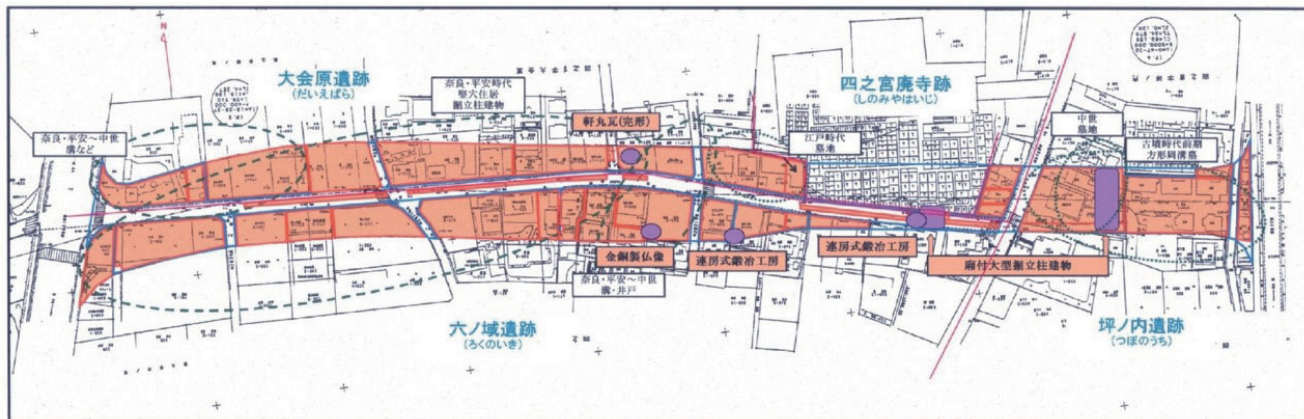


推定相模国府域

(國平健三 1997 より引用・編集)

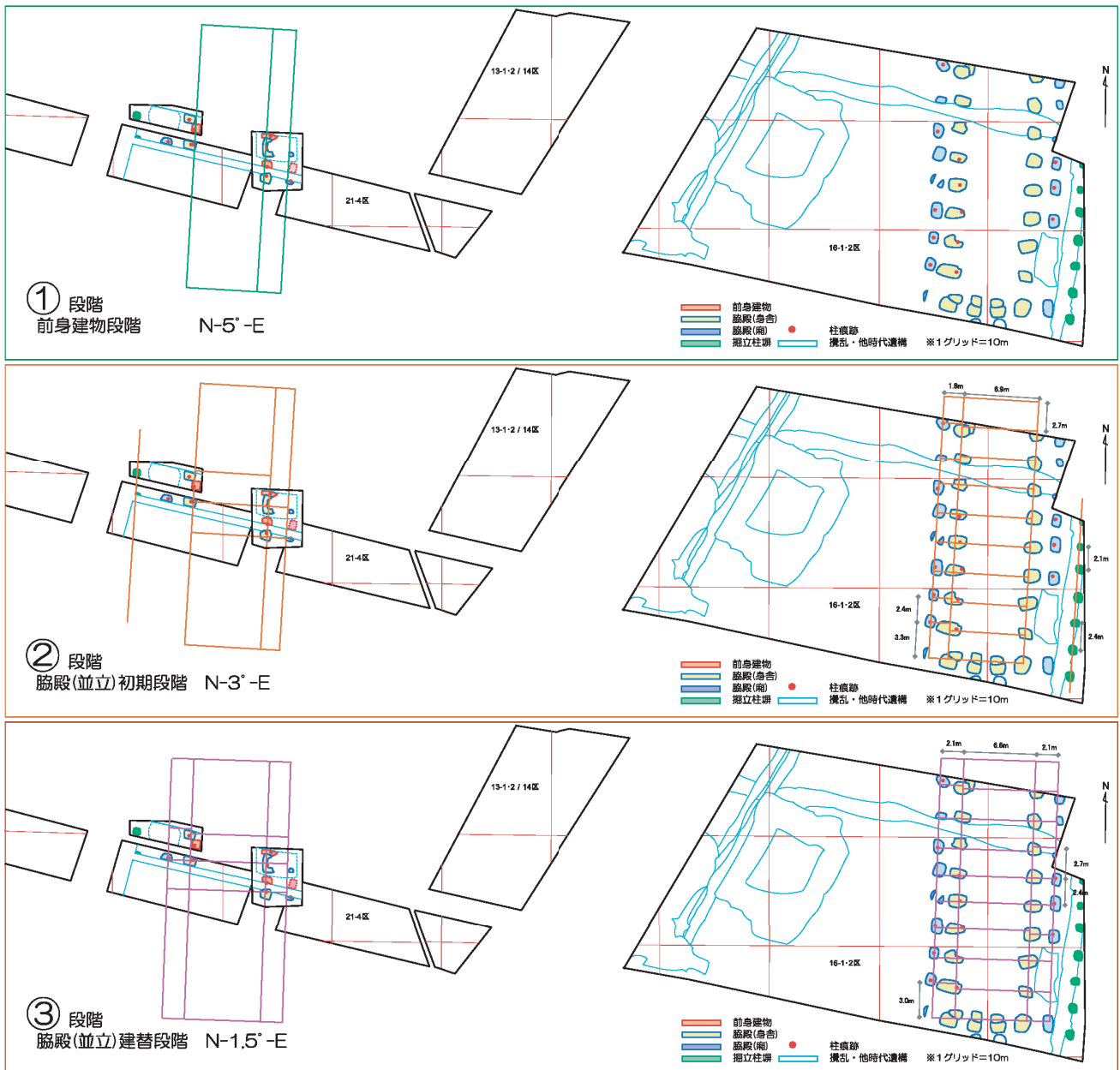
### (2) 当時の神奈川県庁：国庁脇殿

坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡で、国庁の脇殿と推定される大型掘立柱建物が並立する形で発見されました。棟と棟の間の距離は約 58mを測ります。また、一時期において建物の外側を掘立柱塀が囲っていたことが確認されています。残りの良い状態で見つかった東棟から、廂付きの建物であることが分かっており、そのなかでは相模国最大の規模となります。



湘南新道関連遺跡における主な遺構 (柏木善治 2009)





国庁の建物変遷 (かながわ考古学財団 2009②)

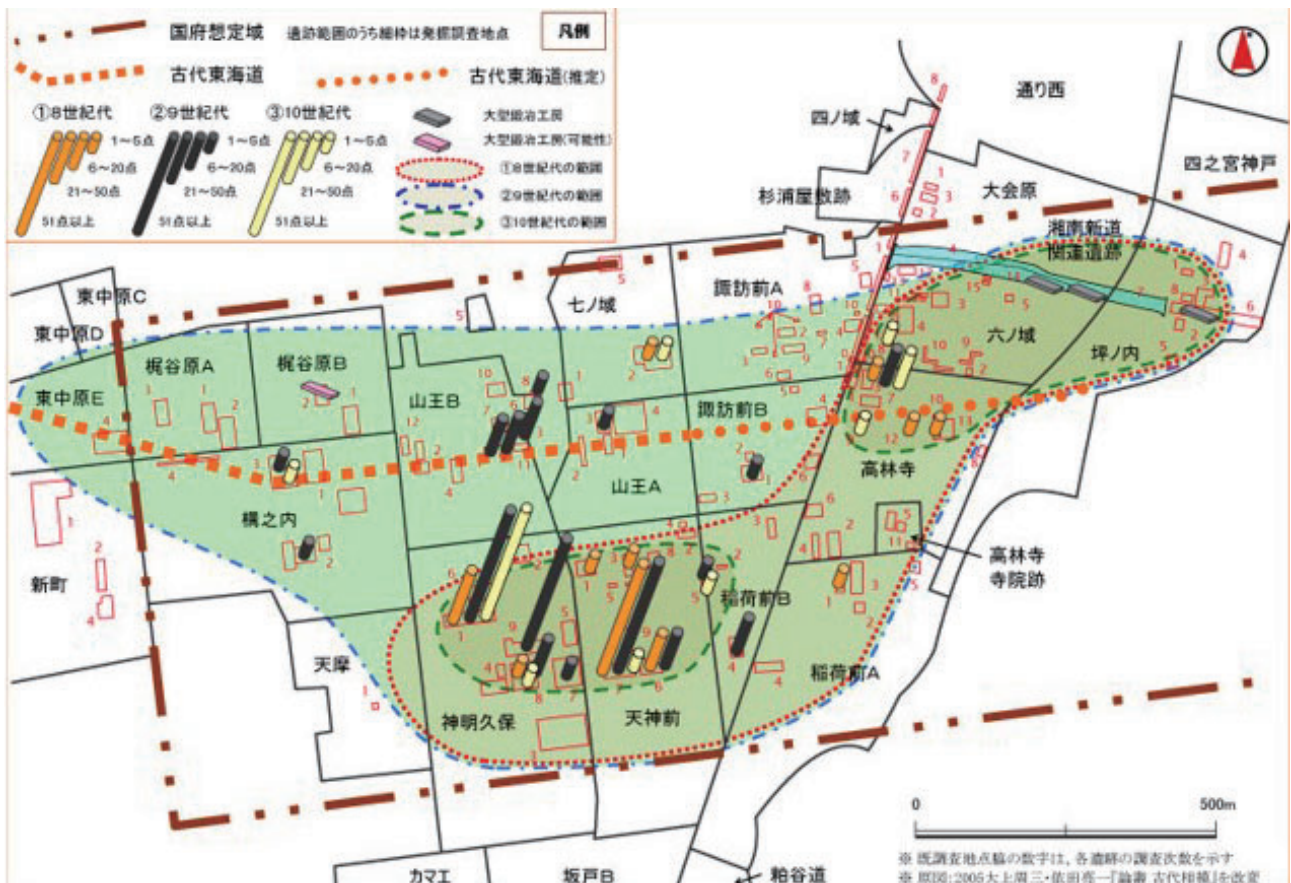
東棟について、主軸はほぼ南北に向き、母屋は桁行9間以上(22m)×梁行3間の建物です。東西に廂を持ち、建物内については間仕切りの柱がありません。母屋の柱穴の規模は長さ1.5m×幅約1mで、深さは状態の良いもので1.2m程度を測ります。調査により1回以上の建て替えが行われたことが推測されており、ほぼ同じ場所に建て替えられ、片廂で掘立柱塀を伴う建物から、二面廂で塀は伴わない建物へ変化したことが想定されています。西棟については、調査面積が狭く部分的な発見となりますが、調査によって東棟と同時期・同規模の建物であることと、2回以上の建て替えが行われたことが確認されています。



東棟 上空写真 (かながわ考古学財団 2009②)







国府域内の鍛冶関係遺構・遺物（かながわ考古学財団 2007）

そして、国府域内の鍛冶関係遺構・遺物における時期別の検討から、3つの段階に分かれることが示されています。

①段階（8世紀代）：国府域の南から東側にかけて分布が見られます。

②段階（9世紀代）：8世紀代の遺構の展開を維持しつつ、国府域のほぼ全体に広がりを見せます。

③段階（10世紀代）：神明久保・天神前遺跡付近と、六ノ域・坪ノ内遺跡付近とに、2つのまとまりに分かれたようすを見せます。

## 5、おわりに

国府の基本的なことから古代相模国府について、主な発掘調査成果を中心に見てきました。当時の相模国府において、役所の建物が建っただけでなく、大きな道路が通っていたり、大型鍛冶工房が操業されていたことを確認しました。そのほかにも、これまでの調査からは多くの竪穴住居や特殊な遺物・様々な種類の土器が多量に確認されています。そうしたことから、当時の国府は多くの人やモノが行き交う、相模国において中心的な場所であったことがうかがえます。

## 【参考文献】

- 江口桂 2014 『古代武蔵国府の成立と展開』 株式会社 同成社
- 江口桂 2017 「平安時代における国府の変容—武蔵国府を中心に—」  
『条里制・古代都市研究 第32号』 条里制・古代都市研究会
- 大橋泰夫・江口桂 2020 『季刊考古学 第152号 古代国府・最新研究の動向』（株）雄山閣
- 柏木善治 2009 「かながわ考古学財団入門講座 第5回ようこそ考古学 発表資料」
- かながわ考古学財団 2007 『湘南新道関連遺跡 III』
- かながわ考古学財団 2009①『湘南新道関連遺跡 II』
- かながわ考古学財団 2009②『湘南新道関連遺跡 IV』
- 國平健三 1997 「相模国府研究の現状—発掘調査成果による大住府についての検討（一）」  
『神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第23号』 神奈川県立歴史博物館
- 野村不動産株式会社・株式会社盤古堂 2008 『武蔵国府関連遺跡調査報告  
プラウドシティ府中建設に伴う事前調査』
- 平塚市 2003 『平塚市史 11 別編 考古(2)』 平塚市
- 府中市教育委員会 2006 『新版 府中市の歴史』
- 府中市郷土の森博物館 2016 『府中市郷土の森博物館ブックレット 17 よみがえる古代武蔵国府』
- ふるさと歴史シンポジウム実行委員会 2006 『復元！古代都市平塚～相模国府を探る～』
- 山中敏史・佐藤興治 1985 『古代日本を発掘する5 古代の役所』 岩波書店
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
- 依田亮一 2020 「古代の武蔵と相模」『となりの“くに”と相模』 神奈川県教育委員会